

2. どのような対応・支援を適切だと感じたか

被害者にとって、被害後にどんな支援を受け、役立ったと感じたのはどのようなことだったのでしょうか。刑事手続きにおける対応、民間支援団体による支援、また当事者団体とのつながりなど肯定的に語られたものを、以下にまとめます。被害者の目から見て何が役立ったのか、具体的に把握できます。

【刑事手続きにおける適切な支援】

この方は、警察、検察の対応について自分のペースに合わせて話を聞いてくれたと感じ、公判の被害者参加制度も利用しました。裁判員が代弁して、自分の聞きたい内容を質問してくれたと語っています。

「参加して、いろんな証拠とかが見れるんで、その部分は良かったのかなって。」「（検察官よりも）…結果的には、その裁判では、裁判員の方が、どちらかというと私の聞きたい内容を代弁してくれて、その裁判長も止めなかったんで、すごい心情的な部分っていうのは聞いてもらえた。自分、私からじゃないですけど、聞いてもらえたかな。」

(P3)

【民間支援団体(センター)からの適切な支援】

上記の方は、マスコミの過剰報道に苦労しましたが、センターにつながることができ、刑事手続きの情報を得たり弁護士の仲介をしてもらうことができ、苦境を乗り切れたと語っています。遺族が何を必要としているかが読み取れます。

「…でも、いろんなことが、誰かに何かを話したら、マスコミが嗅ぎつけてっていうような状況が何となくあったんで、やっぱりその支援団体の人だったら、別に何話してもいいっていうのがあったんで、今考えると、そこがなかったら乗り切れてなかったのかなっていうのはあります。」

「弁護士っていうか、その制度自体の中身を、いまいち説明が、ちゃんとしたものとか、経験談とか、全くなかったんで、多少はそこで、（センターと）つながったところで情報を取れたのは大きかったなと。あと、そうですね。裁判も、そこに傍聴っていうか、一緒に付き添いをお願いしたりとかして…」 「弁護士とかは全く、やっぱりその時点で被害者側の経験とかがなくて、そんなに何か気持ち、心の部分、精神的な部分とかで全く分かってくれない人だったんで、そういうのも支援団体の人に言って、そこで間に入って、何か言ってもらったりっていうこともあったかなと。」

(P3)

【当事者団体や自助グループとのつながりに助けられた】

このインタビューのご遺族4名のうち3名の方は、当事者団体や自助グループとつながりをもつようになります。その活動から何を得たか、活動の意義が語られています。

✓ 全国的な犯罪被害の当事者団体とつながり、新たな気づきや学びがあった

「〇〇の会（犯罪被害者遺族の会）、事件から2年くらい過ぎたところに、やっぱり、同じ被害者と話したいし、「こんな経験して、これだけで終わっちゃうのは何だか、やり切れないな」っていう思いもあって、〇〇の会を見つけて、参加しました。そこでほんとに「なんだ、この、裁判の制度が悪いから、あんな嫌な思いをしたんだ」っていうふうに、思

い至って、なるほどって納得したのを覚えています。その当時の会はいろんな弁護士さんを招いて、ただの自助グループじゃなくて、勉強会みたいなのをいっぱいやっていたんです。そこで、本当にいろんなことを、まったく自分が何も知らなかったんだということがよく分かるぐらい勉強させていただきました。」「みんな殺人事件の人ばかりが集まっているので、同じ被害にあった人とお話ができるというのは、それはやっぱり一つ大きかったです」(P2)

✓ 自ら自助グループをつくり、臨床心理の専門家のサポートも得た

自分で地元で被害者支援のグループをつくり、臨床心理の先生からバックアップを得て活動の幅を広げていった方もいます。地元の被害者の方とつながれたことが一番の支えだったと、つぎのように語っています。

「翌年に裁判が終わった後に、… 同じような被害にあった方たち、皆さんどうしてるんだろうと思って、どうにかそういう人とつながれないかなと思って、県外の犯罪被害者の自助グループに入ったんです。そのつながりでいろいろあった中で、事件の翌年の9月に「県内には何でこんな自助グループがないんだろう」ということがあったので。じゃあ、ないんだったら自分でやろうと思って。地元で「□□の会」という被害者支援のグループつくったんです。そのときに、〇〇大学の臨床心理の先生と出会う機会があって、その先生が支援員としてバックアップしてくださったんですけども。(中略)… そのときに認知行動療法とかマインドフルネスとか、いろいろな呼吸法とか、自分が楽になれるようなサポートできるようないろいろな方法とか、そういうのをいろいろ教えていただいて。」

「県内の被害者の方とつながれたっていうのが、やっぱり一番… 私の、何ていうのかな、回復の助けになったっていうのはやっぱり。同じような… メンバーのおかげかなとは思ってます。どこかの専門的な機関と、何か支援していただいたとかそういうのはまったくないので。自助グループ同士の横のつながりとかそんな感じで、活動していく中で少しずつ… お互いに自分たちのこの事件のこととかを話したり、聞いてもらったりとか。悔しかったりとか… そういう気持ちとかを共有できたのが一番の支えだったかなと思ってます。」(P4)

【周囲から心配してもらっていると感じた】

母親が強盗致傷の被害で重体に陥った方は、当時異国の地で周囲に気にかけてくれる人がいたことがよかったと語っています。周囲のかかわりは仕方によっては二次被害となる場合もありますが、この方は純粋に周りから心配してもらったと感じた様子がうかがえます。

「やっぱり… 気をかけてくれている人がいるっていう感覚なんでしょうね。それは、僕は良かったと思います。」「家に帰ると1人だったので、病院、病室とかで、そういうふうに気にかけてもらえてるっていうのは。だから、プラマイゼロみたいな。プラマイゼロっていうか、家にいるとき、すごい寂しかったので。そういう意味で、そういう感じのやつが合わさって、きっと良かったんでしょうね。」(P5)